

# 柞乃杜

秩父神社社報  
柞乃杜(ははそのもり)

第 48 号

平成25年12月3日  
(大 祭)



伊勢神宮の朝 (平山郁夫 画)

宮はしる

照りそふ

正か

日みか

## 伊勢の御遷宮と弊社の式年を奉祝する

めでたく伊勢の神宮の 千古変わらぬ式年遷御の大儀が成就しました。  
去る十月の二日と五日の浄間に 内宮と外宮の御祭神が夫々の新宮に遷られ  
二十年振りに六十二回目の「常若」の再誕を果たされたのです。

ふりかえれば過去二十年のあいだ 国の内外に容易ならぬ事件や災害が重なって  
社会が疲弊し人心が混乱して世も末の世相を呈しておりましたが このところ  
ようやく万事立ち直りの燭光がほの見えてきたのも故なしとせずの感があります。

そうした萌しを確かな地元の蘇生に活かすべく 弊社も来年に式年奉祝を迎えます。  
来たる平成廿六年は 創建二千年という式年の佳節を迎えることになるからです。  
来々十二月の大祭には画期的な奉祝行事を 来年度から十年のあいだ奉祝事業を  
共に地元活性化に寄与すべき 魅力ある行事と事業とを推進して参る所存です。

解説 秩父神社 (47)

権備宜 甲田豊治

◆ 社殿彫刻が伝える文化

今回は、社報第44号(平成23年冬号)で掲載した社殿彫刻「猩々」の続きを述べてみたいと思う。

当社の「猩々」は、「親孝行の高風が、夢のお告げにより市場でお酒を売り、富貴となる。そして、ある夜、揚子江から猩々が現れ高風の素直な心を賞して、酌めども酒がつかない甕を与え、舞を舞う。」と云う能楽を題材に表現したものと解説した。その同例として、宮地屋台の後幕に見える「猩々酔舞」も掲載し、その姿形からも解るように、頭髮から顔身体衣裳に至るまで、全身真赤に表現されている。

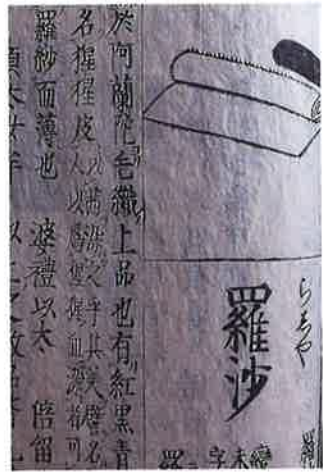


拝殿正面『恵比寿・大黒と猩々』

このように「赤(猩々)」という色には、庶民に於いて悪疫除けを表し、また戦国時代の武将たちには権力の象徴として認識されていたようである。では、次に江戸初期と伝わる社殿彫刻完成時の「猩々」は一体どのような認識されていたか、昭

猩々Ⅱ赤色から、この色に着目してその意味するところを述べてみる。先ず赤(朱・緋)色は、天然痘の流行つた時代、疱瘡除けとして子供たちには赤い下着や玩具などを持たせる風習があった。例えば赤い御幣束や赤一色で描いた魔除けの鍾馗絵、そして真赤な玩具として特筆すべきはやはり「猩々の人形」である。健やかな子供たちの成長を願い悪疫除けの象徴として「赤(猩々)」を認識していた様に思われる。

また、正徳二年(一七一二)成立の和漢三才図会には、「猩々皮」と称して「羅紗」の項目に記載が確認できる。戦国時代の武将たちは舶来品で希少価値の高い羅紗織りの真つ赤な「猩々皮」の生地で作った陣羽織を有することにより、時の支配者としての権威の象徴としていたと伝わる。



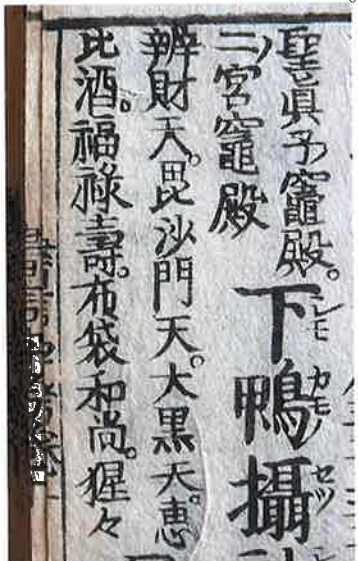
『和漢三才図会』の猩々皮

和の大改修の折、社殿の天井板や飾り金具の裏面に残る「天和」という年号から、その時代の文化を追ってみたいと思う。

ここで注目されるのが拝殿「猩々」の二段に位置する恵比寿・大黒である。

恵比寿・大黒は福の神、そしてこの二柱に関連し毘沙門天・弁財天・福祿寿・寿老人・布袋和尚の七柱で構成される「七福神」と「猩々」との時代的関連をみると大変興味深い事が明らかになった。

実は、室町中期より日常の言葉や漢字で表記するための用字集(国語辞典)を節用集と言ひ、延宝八年(一六八〇)に成立した『合類節用集』のなかの七福神の記載によれば「寿老人」の代わりに「猩々」



『合類節用集』の七福神

がはいった構成になつてゐる。延宝は天和の一つ前の年号であり、時代的にはほぼ同時代である。当時寿老人と福祿寿は南極老人星とされ同一視されたものとみられる。その後の享保二年(一七一七)に成立した『和漢音釈書言字考節用集(合類大節用集)』でも第十巻数量・氏姓の「七福神」に「猩々」が確認できたのでここに掲載する。このように、当時の人々にとつて「猩々」は、現代人よりも広く一般的に認識されていたように思われる。すなわち、妙見宮社殿正面にこの彫刻を配すると言ふことは「猩々」を通して「高風の清らかな心」、「赤色が意味する悪疫除け」、「家康公ゆかりの権威の象徴」更には「富貴をもたらす福の神」を表現し、攘災招福の願いを込め、お参りする人々を出迎えているように感じてならないのである。



## 御創建二千百年の奉祝を目指して

宮司 藺田 稔

## はじめに

近年は、しきりに日本の古典古代を現代に蘇えらす機会に恵まれているように思います。

まずは本年の秋十月初旬に、古来「国家の重儀」と称える伊勢の神宮式年遷宮が盛大に挙行され、二十年振りに第六十二回という実に飛鳥時代より一千三百年余り千古の伝統が「常若」のお姿に蘇えったことは、世界文化遺産を遙かに超える国家的慶事でありました。

さらに本年の五月には、やはり六十年振りに出雲大社の大遷宮が成り、これもまた太古の国譲り神話を想起せしめる大儀でありました。

わが国の誇るべき古典文化は、変転する歴史を凌いで創業の始めが定期的に再現されるといふ祭儀性にあるのです。神道文化においては、正月に年の命が若返り、祭礼ごとに神霊が蘇生し、神社が式年という記念すべき年に社運を更新する習いなのです。

## 一 秩父神社の創建を比定する

弊社の場合も、創建神話を踏まえて社運を一新すべき好機を迎えることになりました。

ご高承のように、弊社は平安時代の古典『先代舊事本紀』所収の「國造本紀」知々夫國造の条に「瑞籬朝御世。八意思金命十世孫知知夫彦命定賜國造一拝三祠大神」といふ記事を典拠にして

創建の由緒としております。「瑞籬朝ノ御世」とは第十代崇神天皇の時代ですから、『日本書紀』崇神天皇十一年夏四月の条に前年に畿外四道に派遣された將軍が諸国を帰順させたことを奉告したとある記事に鑑みてこの年を弊社創建の年に比定しますと、皇紀に基づけば来年が創建二千百年に当たるといふことになるわけです。

## 二 創建二千百年を式年奉祝する

そこで弊社では、明くる平成廿六年を式年奉祝の年と定めて、まずは来年十二月の例大祭を式年奉祝大祭として記念行事を企画し、併せ今後十年に亘る記念事業を推進して懸案の関連施設実現を図ることに致しました。

まず記念行事と致しましては、(一)新たに弊社固有の祭祀舞「柞の舞」を創作して来年の祭典に奉納し、以後折ごとの神事に奉奏する。(二)大祭期間中に秩父地方に伝承されている神楽・獅子舞・歌舞伎・人形芝居など多くの参加を得て「郷土芸能サミット」を開催する。(三)同期間中にかねて打診のある倭式騎馬会の流鏝馬奉納をお旅所齋場前で執行する。などの実現に努める所存ですが、特に(二)(三)については地元観光協会や教育委員会を始め秩父祭対策本部の関係諸団体のご理解とご協力を仰がなければなりません。

つぎの奉祝事業につきましては、以下の五項目を紹介しておきます。

- (一) 埼玉県文化財である本社社殿の修復事業、とりわけ重要な彫刻類の補修と塗り替え。
- (二) 秩父宮家の御聖徳を永代に顕彰すべく両殿下の御神霊を祀る別宮「鴛鴦神社(仮称)」を境内を整備して創建する。これには一般社団法人秩父宮会のご理解とご協力を要する。
- (三) 秩父公園のお旅所齋場を修築して、



山宮たる武甲山と里宮たる秩父神社とを結ぶ秩父夜祭の中核施設であることを明確に示すよう整備する。

(四) 武甲山の山頂に弊社奥宮(山宮)の小祠を創建して、神体山本来の祭祀形態を復元する。これには、山頂に現存する御嶽神社をはじめ地元関係団体との了解を要する。

(五) 門前町を整備し活性化するための施設として番場通りの入り口に大鳥居を建立する。これにも地元町会や商店組合並びに中心市街地活性化に関連する市当局や関連団体との密接な協議を図る必要がある。

### むすび

以上の項目は、いずれも容易に実現できるものではありません



が、ともかくも向う十年の事業構想として、その内の可能なものから実現に努めて参る所存です。しかし弊社としては、これらの諸事業は決して身勝手な構想ではなく、いずれも秩父地域が将来にめざす魅力ある観光保養地化に寄与すべき方策であり、その実現の暁には他の観光地にはない秩父ならではの個性的な中心市街地を形成するものと確信しております。

その意味では、弊社の奉祝事業には直接関連しない当面の市街地活性化事業に、市当局や商工会議所が推進しておられる各種のものがありますが、蛇足ながら以前より本誌で何度か提案してきた「回遊型祭礼博物館」構想なども、空洞化が深刻になりつつある市街地に新たな店舗の賑わいをうながす手立ての一つにでも検討の対象にして欲しいものです。

### 【表紙和歌解説】

日にましてひかり照りそふ宮ばしら

ふきいれたもふ伊勢の神かぜ

この短歌は、江戸中期から大いに栄えた伊勢参りを題材に、当時の戯作者十辺舎一九が世に出してもはやされた滑稽本『東海道中膝栗毛』(享和二年初刊の文中に記載する内宮参拝での詠歌。「すべて宮めぐりのうちは、自然と感涙肝にめいじて、ありがたさに、まじめとなりて、しゃれもなく、むだもいはねば云々」とある。本誌表紙には前句のみ紹介して、故平山郁夫画伯の名画「伊勢神宮の朝」の画賛とさせて頂いた。

### 【表紙絵解説】

この度の表紙絵画は、平山郁夫画伯(一九三〇〜二〇〇九)の作品「伊勢神宮の朝」を掲載させて頂いた。

平山先生は、昭和五年広島県豊田郡(現尾道市)に生まれ、昭和二十二年東京美術学校(現 東京藝術大学)に入学。同二十七年に卒業と共に同校助手、同四十八年東京藝術大学美術学部教授就任。平成元年より同大学学長に就任され、第六代、第八代学長を務められた。

平山先生の作品は、仏教や古代インド、シルクロードをテーマにした絵画が数多く描かれているが、「神宮」に関しての作品は少なく、表紙掲載の「伊勢神宮の朝」は大変貴重な絵画である。

この度の作品掲載に当たり公益財団法人 伝統文化活性化国民協会関係の皆様には多大なるご協力を頂いたことに感謝し、ここに厚く御礼申し上げます。



井上久前奉賛会長を偲び奉る

宮司 蘭 田 稔

本年八月三日に享年九十一歳をもって帰幽された前の弊社奉賛会長井上久様につき、慎んでご生前の偉大なご功績をお偲び申し上げます。

米寿を越えられても矍鑠たる風貌は一向に衰えず、何よりも明晰な思慮と旺盛な知識欲は壯者を凌ぐところがあつて、それこそ最後のご入院に至るまで秩父神社奉賛会及び秩父宮会を始め埼玉県の神社界から全国規模の伊勢神宮にも及ぶ数多のご功績を尽して下さいました。故人は、鎌倉時代以来、秩父神社の宮守地頭・丹党中村氏の名跡を継ぐ井上家累代の筆頭大総代としての重責を果たされた上での幅広いご活躍でした。平成元年より小職が宮司を拝命して間もない同二年秋の今上陛下の即位御大典である踐祚大嘗祭を奉祝して発足した秩父神社御大典奉祝事業には、その当初から同奉賛会長にも就任して頂き、一つには御神門、瑞垣、神楽殿及び神札授与所の全面改修、二つには旧社務所・参集殿の撤去に伴う崇敬会館、平成殿と齋館の新築とその周辺整備を推進するに当たっては、小職の構想に深いご理解を頂いてその実現に物心両面の積極的なご指導を賜わったことです。以来、宮司としてのさまざまな試行錯誤にお

心広くご協力を賜わったことは枚挙に暇ないばかりと、今更ながら改めて感謝申し上げます。もう一つは、秩父神社所縁の社団法人「秩父宮会」へのご貢献です。昭和二十八年に薨去された秩父宮雍仁親王殿下のご尊霊を同年に当社ご祭神にお祀りして発足した秩父宮会は、爾来地元市町村を挙げてご聖徳を顕彰する活動を続け、平成七年に薨去された同宮勢津子妃殿下のご遺徳をも含めて今日までさまざまな顕彰活動を継承しておりますが、故人には平成十四年五月より宮会会長に就任して頂き、晩年に至るまで一段と活発な法人活動をご指導頂いておりました。なかでも、勢津子妃殿下ご出身の会津・松平家との親善交流を積極的に進められ、実際に妃殿下の甥御さまに当たられ松平恒忠様とのご縁で両殿下のご遺品を宮会にご下賜頂いたり、また会津松平家

の顕彰組織「会津会」との親善交流を深めるなど井上会長ならではの功績を残して頂きました。

故人は、二年前の米寿を迎えた頃から永別の近いことを覚られて、二篇の随筆を書き遺されました。一つは、三年前の「米寿に想う」(秩父郡市医師会誌四号、二つは、今年六月の「黄泉の国を旅して」(埼玉県皮膚科医学会報創刊号)という二篇のエッセイです。その前稿では、むしろ学生時代の遍歴をユーモラスに記し、後半に最近の心境を綴って仏教書から無心境地に憧れながらも「生涯現役」を貫くことを語っておられ、後稿では、今年の二月に帯状疱疹を治療した挙げ句に三日間の意識喪失を体験。この臨死体験を「黄泉の国」への旅として振り返られ、死後の世界は仏教という無の世界であり、むしろ安心立命の境地、神道的には死後の魂が逝く所、死者が棲むという黄泉の国と表現されています。この二つのエッセイは、最晩年にも医師としての冷静で明晰な思考力を失わない故人ならではの大変に貴重な遺作として、やがて故人の跡を追うべき私どもに大きな示唆を遺して頂いたものです。因みに、八月八日のご葬儀に井上家累代の菩提寺、臨濟宗金仙寺より賜わったご戒名は「天真院直心了覚居士」、まさに故人晩年にふさわしい諡(おくり名)と思えます。

亡くなられた八月三日の午後には村のご自宅に遺骸をお迎えして奥座敷に安置したそのお姿は、まるで彼の奈良斑鳩の古刹、法隆寺の国宝・百済観音立像の長身を横たえたかに思えるほど、穏やかで涅槃の境地をお顔に示しておられました。

まだ意識もあつて酸素マスク越しに会話のできた内に最後のお見舞いをし、伊勢からの遷宮土産の小さなストラップを故人の小指に懸けながらお別れができたことを、せめてもの慰めにして、故人のご冥福を心からお祈り申し上げます。

井上久氏 略歴

- 昭和五十一年〜平成八年 秩父郡市医師会会長
- 昭和五十七年三月〜平成二十五年八月 秩父神社大総代
- 平成二年四月〜二十五年三月 秩父神社奉賛会長
- 平成四年四月〜二十五年三月 埼玉県神社庁協議員
- 平成四年四月〜十六年三月 埼玉県神社庁協議員
- 平成四年四月〜二十五年三月 埼玉県神社庁協議員
- 平成四年四月〜二十五年三月 秩父神社氏子総代連合会評議員
- 平成八年六月〜十年 埼玉県議会議員
- 平成十一年八月〜二十五年三月 伊勢神宮崇敬会理事
- 平成十三年三月〜十六年三月 埼玉県神社庁協議員副議長
- 平成十四年五月〜二十五年八月 秩父宮会会長
- 平成十六年四月〜二十五年三月 埼玉県神社庁協議員副議長
- 平成十五年 叙勲 勲五等旭日章



# 梟だより



## 『秩父繭』 神宮奉獻

欄宜 新井直行



この秋、伊勢の神宮では第六十二回式年遷宮が執り行われ、その佳節の秋に合わせJAちちぶ養蚕部会(宮崎豊二部会長)では、研修旅行を計画され、去る十一月五日六日の二日間、わたる伊勢参宮を行いました。今回はJAちちぶの宮澤組合長も同行され、宮崎部会長以下関係者は五年前に続き二度目の参宮を果たしました。

五日に外宮、六日に内宮の御垣内特別参拝をさせて戴き、内宮には各生産者が丹精込めた繭と生糸を奉獻致しました。殊に今回は御遷座直後の外宮古殿の内覧が許され、緊張の中参加者一同普段拝観の出来ない場所に入れさせて戴き神妙な出来なひと時を過ごしました。二十年の歳月に古びた御正殿の様子は、千三百年の悠久の時を感じるものでした。今回は若い世代の参加もあり、

鳥羽湾を望む宿の懇親会では、大いに親睦が深められ有意義な研修となりました。二日間の短い日程ではありましたが、天候にも恵まれ所期の目的が達成され、無事終了しました。

近年「いろどり」をはじめ秩父地域生産の繭が大いに認められ、需要が促進されていることは喜ばしいことであり、今後とも関係者皆様の健康とご発展をお祈り致します。

## ◆親子で登る武甲山

十月六日(日)当社氏子青年会主催、埼玉県神社庁秩父支部「お宮と親子の集い」協賛による「親子で登る武甲山」が、総勢六十九名の参加を戴き、賑やかに行われました。多少曇り気味でしたが、前日からの悪天候も回復し、約四時間かけて登りました。途中珍しい植物や生物に子供たちは興味津々でした。山頂に鎮座する御嶽神社に一同で参拝した後、各々昼食を取っていたところに野生の鹿があらわれて子供たちは大騒ぎとなりました。



参加者全員無事に事故もなく、大変印象深く楽しんだ登山になった事と思えます。また今後

「武甲山登山」を企画致しますので是非多くの方に参加戴きたいと思えます。

## ◆夜祭限定 妙見守護符



鈴清め度も夜祭に際して、特別限定妙見守護符

護符と清め鈴を整えましたのでご案内申し上げます。

妙見様のお姿は、ご家庭の神棚にてお祀りして戴き、また、社殿祈禱で行われる御鈴神事より、ご家庭にて妙見様のご加護により心身共に浄めて戴く清め鈴を奉製致しました。数に限りがございますのでお早めにお受け戴きますことをお薦め致します。

## ◆秩父神社妙見講

自 平成二十五年 九月  
至 平成二十五年十一月

- 九月 一日 小鹿野講
- 松本守講元外百九名
- 九月 七日 荒川妙見講
- 浅海 忠講元外九十四名
- 九月 十五日 上町講
- 島崎弥平講元外百九十四名
- 九月 二十九日 桜木講
- 寺林義夫講元外二百二十四名
- 十月 五日 中村講
- 高橋信一郎講元外二百八十二名

## ◆柞乃杜前結婚式報告

- 十月 六日 上宮地講
  - 大島耕造講元外百八十二名
  - 十月 二十六日 東町妙見講
  - 三友直彦講元外九十六名
  - 十月 二十七日 中町講
  - 久保忠太郎講元外百三十名
  - 十一月 九日 番場妙見講
  - 宮野前方也講元外九十六名
  - 十一月十五日 野坂講
  - 浅見伊久雄講元外百八十名
- 本年より上町講 島崎弥平様、上宮地講 大島耕造様、中町講 久保忠太郎様、野坂講 浅見伊久雄様が新たに講元に就任されましたので報告致します。どうぞ宜しくお願い致します。

- 寄居町寄居 野村佳生・康津恵様
  - 東京都世田谷区 四方直道樹・祐子様
  - 神奈川県川崎市 新井 貴・千絵様
  - 秩父市荒川小野原 澤井孝延・千秋様
  - 秩父市大野原 原 淳・小枝美様
  - 秩父市中村町 千島 将・麻衣香様
  - 東京都稲城市 根本冬樹・志保様
  - 深谷市東方 宮崎達弥・ゆき野様
  - 本庄市朝日町 カット・ロバート・豊様
  - 秩父市中村町 町田尚城・あゆみ様
  - 秩父市久那 磯田貴史・久美子様
  - 横瀬町横瀬 石田良介・久実様
  - 横瀬町横瀬 浅見卓司・ゆかり様
  - 秩父市中村町 栗島 俊・沙緒里様
  - 秩父市日野町 黒澤直良・ゆかり様
  - 東京都渋谷区 田中清彦・千夏様
- 未永く幸せな家庭をお築き戴きますようお祈り致します。

◆ 神宮式年遷宮  
御白石持行事に参加して

権欄宜 伏見博樹

七月二十七・二十八日に当社氏子青年会 山本会長以下三千名で第六十二回神宮式年遷宮「御白石持行事」に参加してまいりました。

式年遷宮は八年間にわたり、三十におよぶ祭典、行事が行われてきました。

今回は、伊勢市の皇學館大學社会学部 櫻井治男教授のお計らいにより、私共が直接関わることである数少ない行事のひとつである



「川曳」を地元民の神領民の桜木町内宮奉献の方々と共に奉仕させて頂きました。当日は気温三十度を越える猛暑の中、揃いの法被姿で御白石が納められた樽を川ソリに載せ、五十鈴川を約三時間奉曳いたしました。

皇大神宮御神域に到着した後、一人一人が清浄な白布に包んだ御白石を手に御正殿の敷地へ参入、檜の香り漂う白木の御正殿を間近に拝し、御白石を奉献いたしました。

二十年に一度宮処を改め、古例のままに一切を一新して、大御神の新殿へのお遷りを仰ぐ式年遷宮の一端を担えましたことは、参加者一同大きな感動を覚えた次第です。

翌二十八日には豊受大神宮にて御垣内参拝し、これまでの二十年、これからの二十年に思いを馳せての参宮となりました。

最後に、櫻井治男教授、桜木町奉献団御関係の皆様方に御礼を申し上げます。

◆ さいたま絹文化研究会発足

秩父は古くから養蚕の盛んな地域として知られ、「秩父夜祭」を「お蚕祭」と呼ぶほど「繭」に大変関わりの深い行事が行なわれております。十二月四日に斎行される「養蚕倍盛祈願祭」では、秩父郡市で養蚕に携わる関係者の参列を頂き、一年の成果である沢山の「繭」を御神前に奉納し厳肅な祭典が行われます。また大祭期間中は特別奉納品として埼玉県独自ブランドである「いろどり繭」が展示され、多くの参拝者にご覧頂いております。

そして、この度「絹の文化」を秩父だけに留まらず広く伝えるべく、川越・氷川神社、日高・高麗神社そして当秩父神社の三社とNPO法人「川越きもの散歩」が密に連携をして、「さいたま絹文化研究会」を発足致しましたのでご案内申し上げます。

活動として、年3回の会報の発行。来年三月には川越・氷川神社を



編集後記

会場に講演会を予定しております。只今会員を募集しております。興味のある方は担当事務係甲田権欄宜までお問い合わせ下さい。

■ここに社報柞乃杜第48号大祭号をお届け致します。

■今から一四〇年前の明治五年二月二日から三日にかけて、世の中を一変する出来事がありました。それは人々の生活に欠かせない暦が旧暦から新暦に移行したことでした。当時の記録では、人々の生活に大変混乱を生じたと伝えられています。当社の例祭は、当時霜月三日に斎行されており、「夜祭」の混乱は免れました。

■そして、新暦に替わり本年で百四十回目の大祭を迎えます。更に来年は御鎮座二千年という奉祝の年を迎え、様々な催しなども企画予定です。どうぞご期待ください。



※本報の用紙は再生マット紙を使用しています。

平成二十五年(三〇一三)十二月三日  
編集 秩父神社社務所  
発行 秩父神社社務所  
〒366-0404 埼玉県秩父市番場町一三  
TEL 〇四九四 二二一〇二六二  
FAX 〇四九四 二四一五五九六  
印刷所 有限会社 拓文社印刷所  
〒366-0403 秩父市東町二七一八